

# コミュニティ福祉に今問われていること

—過去を知り、未来を拓く—

- 【シンポジスト】 関 正勝 先生  
福山 清蔵 先生  
坂田 周一 先生  
沼澤 秀雄 先生
- 【コーディネーター】 三本松 政之  
(コミュニティ福祉学会運営委員長/コミュニティ福祉学部学部長)
- 【司会】 鍛治 智子 (まなびあい運営委員/卒業生)

**司会 (鍛治)** それでは皆さま、休憩がない中で恐縮ですが、コミュニティ福祉学会まなびあい第10回年次記念大会シンポジウムに移らせていただきたいと思ひます。本日はシンポジストに関正勝先生、福山清蔵先生、坂田周一先生、沼澤秀雄先生をお招きしております。

まず最初にシンポジストのご紹介と、お一人ずつ近況をご報告いただきまして、お一人から約8分から9分ほどいろいろとお話をいただきます。その後フロアの皆さまからご質問の時間をとりまして、そこで少しまとめさせていただいた後、いったん休憩を挟ませていただきます。そしてその後にもう一度、皆さまからいただいたコメントをもとに、シンポジストの方々、あるいはフロアの方々と一緒にお話を進めていただきたいと思ひます。

では、あらためまして、本日のシンポジウムのテーマが『コミュニティ福祉に今問われていること—過去を知り、未来を拓く—』です。司会は2005年度入学生鍛治 智子です。また、コーディネーターはコミュニティ福祉学部長の三本松政之先生です。

それでは、コーディネーター三本松先生から各シンポジストのご紹介をしていただきたいと思ひます。お願いいたします。

**三本松** 三本松です、どうぞよろしくお願ひいたします。

まず、関正勝先生。関先生は今、ヤマザキ学園大学の副学長をされております。また、聖路加国際大学の嘱託司祭もされております。コミュニティ福祉学部の初代学部長。専門は生命倫理学。続きまして、福山清蔵先生です。福山先生はコミ福

をつくるときに、関先生と一緒にコミ福の最初の準備段階のところを担当されてきて、特に教務関係のことなどを担当されました。関先生は、カリキュラムを組んでいるときに随分福山先生に怒られたという思い出があると話されます。福山先生のご専門は臨床心理学、カウンセリングです。今は『東京いのちの電話』顧問でよろしいでしょうか。

坂田周一先生です。坂田先生は第2代目の学部長であり、大学院をつくるにあたって非常にご貢献いただきました。現在は、西九州大学におられます。坂田先生は今日、九州からおいでになって、明日、本務校の仕事があるので、17時にここを退室されないといけないということです。

それから、沼澤秀雄先生です。沼澤先生は今、まだ現役です。コミ福ができたときの一番若い先生ということで。今日、歴史を振り返っていただくという役割をお願いしております。スポーツウエルネス学科に所属されております。ご専門はコーチ学です。

私のほうからのご紹介は以上です。

**司会（鍛治）** ではもう一度、各シンポジストの先生がたから、簡単に近況のほうをご報告いただければと思います。

**関** 関と申します。どうぞよろしく願いいたします。久しぶりに新座キャンパスに来て、4号館がどこなのか分からなくてうろろろするという状態がありました。私が出た頃は、すなわち1998年からのことですが、図書館と、それから研究棟があるぐらいで。もちろん、野球場が大きく場所を占めているというような状況が。

私は今、ご紹介をいただきましたように、ヤマザキ学園大学という、ここは動物看護師を養成する4年制の大学で、そしてそこにはペットロスだとか、動物介在教育だとか、もちろん獣医師もいますけれども、動物を看護する、介護する、動物と人間との関係をどうつくっていくかというようなことをやる、その場にあります。

それと同時に、聖路加国際病院で週1、2度行って、緩和ケア病棟と、午前中は産科クリニック、午前中は命が誕生したというすごい喜びの中にあるわけなんですけれども、午後1時半からのPCUでは、ターミナル末期医療というか、議論はいつでも、この患者さんの予後はどのぐらいだ、そのときまでをどう、医師と看護師とカウンセラーとMSWだとか、それから、僕らみたいなスピリチュアルケアに携わる人間がどう支えていくかというようなことを協議する、そういう場にいさせていただいているということです。どうぞよろしく願いいたします。

**福山** 福山です。最近では定年退職してからは、家で留守番をしている現状です。私は44年ほど『いのちの電話』の活動に関わってきていますので、その関係であちこちに呼ばれて行っております。先週は山形、今日もじつは横浜で研修会があって、懇親会に出られないのです。先々週が北九州の小倉に行くと、このように、全国あちこちを回って『いのちの電話』研修のお手伝いをさせていただいております。

もう一つ、付け加えると、関先生が元校長をなさっておられた聖公会神学院という、聖公会の牧師を養成する学校があります。そこに週1日「カウンセリング」という科目を担当するためにお邪魔しています。今日は、よろしくお願ひします。

**坂田** 坂田と申します。関先生がさっき、4号館がどこか分からないとか言ってきましたけど、私は関先生と年が10歳違います。

**関** またそんなことばかり言って。

**坂田** その分、関先生よりも長く新座キャンパスに勤務して、4号館の増築やその隣の8号館の建設プランの作成にも関わりましたので、まごつくことはありませんね。私は、昨年3月に定年退職となりまして、その後は九州佐賀県にある西九州大学というところで教員をしております。よろしく願いいたします。

**沼澤** 3名の先生がたの横でマイクを持っていると違和感があるのを自覚しながら話しております。コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科の代表ということでお許しいただきたいと思ひます。現在、コミュニティ福祉学部のスポーツウエルネス学科の教員をしております。最近では年並みといひますか、学部の教務の仕事ですとか、全学共通カリキュラムの仕事がありまして、池袋と新座の間を往復しながら仕事をしていひます。きょうは懐かしい先生がたと一緒にお話ができることを楽しみにして参りました。どうぞよろしくお願ひします。

**司会（鍛治）** 先生方、ありがとうございます。今回は記念大会ということでして、学部ができて20年目。そしてスポーツウエルネス学科が創設され、コミ福が3学科となって10年たちました。『まなびあい』も10回目を迎える記念大会ということで、これから4人のシンポジストの方々にお話しいたきたいと思ひます。今回お招きしていひます皆さまは、学部ができた当時からいらっしやるメンバーということで、創設の時の思い出なんかも含めて伺いたいと思ひま

す。

まず、スポーツウエルネス学科を代表していただきまして、学部の創設から現在まで福祉学部に関わっていらっしゃっています、沼澤先生にお話をいただきましたと思います。その後、特に大学院の設置に関わってこられました坂田先生にお話をいただきたいと思います。そして、福山先生、関先生から、コミ福がどのような形で創設されてきたのか、また、どんな理念を大切にしてきたのか、ということ、思い出深いエピソードなどを交えて、お話をいただきたいと思います。それでは沼澤先生からどうぞよろしく願いいたします。

沼澤 はい。まず皮切りに学部ができてから20年経ったということですが、当時は六大学で初めての福祉学部ということでした。立教大学の学部再編が行われ福祉分野の先生だけではなく、文学部からは宗教系やキリスト教系の先生、それから心理系の先生、旧一般教育部からスポーツ系、語学系の先生が集まって、コミュニティ福祉学部コミュニティ福祉学科の1学科制でスタートしました。当然、新しい学部ですので最初の年は1年次生しかいないわけです。ですので、1年次生が現在も履修している基礎演習は、福祉の教員と他の分野の教員2人体制でした。しかも半期ではなく通年で、1年間かけて20名のクラスを担当しました。時間があれば後で思い出話もしたいと思うんですけど私はそのときに、湯澤直美先生と2人で担当させていただきました。

時間を追って振り返りますと、1学科体制を8年間続けた後、福祉学科とコミュニティ政策学科の2つの学科に分かれました。2008年からは3番目の学科としてスポーツウエルネス学科ができて、1学部3学科体制ができあがりました。1学科体制の頃の教授会は当然ながら、別々の分野の教員がいろんな専門の立場から意見を出しながら様々なことを決定しなければいけないということで、会議も長くなり大変ではありましたが「みんなで決める」という雰囲気がありました。教授会が終わると飲みに行ったりしていましたので他の先生がたの考えていることが大体分かりました。今は、他の学科の先生がたと飲みに行っているんな話をするという機会がなかなかつかれないぐらい忙しくなっていました。

最近の各学科の動向といえますか、当時から変わったところを紹介させていただきたいと思います。まず福祉学科からですが、福祉学科といえば実習教育が頭に浮かびますが、実習教育科目を履修して、施設現場に行って実習をしていく学生が近年少しずつ減少してきているという状況がありました。しかし今年、それがちょっと増えまして、100人ぐらいが実習に参加するということになったと聞いています。

卒業生を出してもう20年近く経ちますと、就職してから、行政やいろいろな施設で中堅クラスとして活躍してくれている卒業生が出てきます。僕も、母親が高

齢で病院に入院したときに、コミ福の先生ですよって呼ばれてびっくりしたのですが、2期生の露木さんというコミ福OGがそこで働いていらっしゃいました。そういう出会いはとても嬉しいことです。

次は政策学科です。福祉もそうなんですけども、当時、助手の方がいらっしゃったのが、教員の名称が変更されて助教になり、実習教育等、サポートをしていたでいます。その助教の先生がたも任期がありますので、その先生がたが代替わりをして、他の職場に移っていかれました。他の大学に教員として行かれたり、他の仕事に就かれたりしています。また、政策学科でいいますと、政策学科の先生方を中心にインターンシップ教育を行っています。正課としての単位を出すインターンシップという授業において、国内、あるいは国外で学ぶことができるようになりました。立教大学がグローバル教育を充実させようと、各学部がいろんなプログラムをつくっていますが、コミ福も政策学科の先生がたを中心にいろいろな取り組みが試行錯誤の中で実施されています。

それから、公務員とか公共団体等またはNPOなどに就職している学生もどんどん増え始めて活躍をしているというようなこともご報告したいと思います。

さらに、学部の英語教育を充実させるために政策学科の教員として英語教員を置いています。城西大学に移られましたがリッチー・ザイン先生に3学科の英語科目を担当していただきました。現在は山口綾乃先生に海外プログラムの開発を含めて頑張らせていただいています。

最後にスポーツウエルネス学科ですが、スポーツだけではなくウエルネスという、よりよく生きるというところで他のスポーツ系学部と違いを出しています。その中で学生も福祉系や心理系の授業も履修できるという特色があります。1年次では他のスポーツ系大学と同じように保健体育の教員になりたいという希望者が多いです。しかし、学年が進むにしたがって採用試験が厳しい、教員という仕事がついとというのが分かってくることもあるのかもしれませんが、他の学部生と同じように就職活動をして一般企業を選ぶ傾向が強くなってきています。

スポーツに関わる現場に行ってる学生も増えてきました。スポーツウエルネス学科からプロのスポーツ選手も何名か輩出しています。野球で4人、ラグビーでも今、実業団に所属している選手がいます。サッカーではタイの3部リーグで頑張ってる学生がいたりします。

以前の思い出を最後にお話ししたいと思います。コミュニティ福祉学部では3月始めに学部研修旅行という研修会をしていました。単なる研修会ではなくて、いろんな現場に行って働く人の声を聞いたり、いろんな施設を訪問したりということで、北は北海道から南は沖縄まで行きました。そこで先生がたといろいろお話をしたことが非常に印象に残っております。また、1期生の基礎演習の受講生20人が、本当に強烈なメンバーで今も何人かは連絡を取り合っています。全員を

紹介することはできないので2人紹介したいと思うのですが、1人は学部有的时候きに1年間、タイに放浪の旅に行って帰ってきてJTBBに就職した富貴浩くんです。タイ支店に配属されて良かったと思っていたら帰国後に日本オリンピック委員会に出向することになりました。現在、東京オリンピックを成功させるべく、幾つかの競技の広報の仕事をしています。それからもう一人が常井健一くんです。彼は新座キャンパスの学園祭IVY Festaの初代実行委員長でした。今は池袋キャンパスとは違った地域密着型の良い雰囲気の学園祭になっていますが、全く何も無い状態から作り上げることは大変だったと思います。彼は卒業してから東大の研究生、アエラの記者などを経て、オーストラリアで1年間政治の勉強をし、帰ってきてからフリーで記事を書いています。現在は、政治家の小泉進次郎氏を追っかけて本を執筆する作家活動をしています。他にも音楽活動をしていたり、福祉という分野にこだわらずいろいろなことをやっている風変わりな卒業生もいました。でも、そのそれぞれの仕事の中にはコミュニティ福祉学部の精神が奥底にあるのではないかと思ったりしています。

**坂田** 私は新学部に着任するとすぐ、大学院設置委員会の委員長を命じられました。設置認可申請のための趣意書を始めとする各種資料の作成や事務体制の構築などいろいろな業務がありまして、準備に結局4年間かかり、2002年4月に大学院コミュニティ福祉学専攻科修士課程が誕生しました。その前後の状況についてお話いたします。

学部のカリキュラムは専任教員と多数の兼任教員が授業を担当していますが、大学院はそれとは違って、専任教員が主体となって教育研究を担当する方式ですので、専任教員の専門分野を踏まえた計画を立てることになります。学部がスタートした1998年当時は、32名程度の専任教員の方がおられました。専門分野で分類すると、社会福祉学が10名、キリスト教学が4名、臨床心理学が4名、スポーツ健康科学の先生が10人くらいおられました。それから、フランス語1人、ドイツ語1人、英語2人で、合計4人の言語の先生がいらっしゃいました。専任教員のうちスポーツと言語は全カリの授業担当が多いため、大学院は社会福祉学、キリスト教学、そして臨床心理学の教員を中心に組み立てることになりました。

もう一点、重要なこととして、この大学院は臨床心理士の養成を目的の一つとしていたことがあげられます。当初、一専攻のみで構成される大学院の構想を立てていましたが、当時の文部省、現在の文部科学省ですね、構想書類をもって役所を訪問していろいろと話を聞いているうちに、臨床心理士を養成する専攻の名称には「福祉」の文字が入らない方がよさそうだという感触が得られました。そのため、「社会福祉学専攻」と「人間関係学専攻」の2専攻制とし、「人間関係学専攻」の入口を「臨床心理学コース」と「宗教人間学コース」の二つに分ける案

が固まりました。

こうして認可がおりて、2002年4月に入学定員30名、かなり多い定員でしたが、スタートいたしました。臨床心理学コースは非常にたくさんの受験生、100人近い応募者があり、このコースに20人近くが入学しました。万々歳ですよ。狙った通りです。ところが、始まってすぐに、5月ぐらいになって、いや4月の間だったですかね、財団法人日本臨床心理士資格認定協会からクレームがありました。一つの大学で臨床心理士資格認定ができるのは1研究科だけだと言うのです。本学には、文学研究科心理学専攻が存在していて、そちらがすでに課程認定がなされているので、コミュニティ福祉学専攻科の方は駄目だと、こういうお話でした。実は裏話としては、開設前年の年末ごろ、当時の大橋総長、関学部長そして笠原総長補佐の3名が財団を訪問して内諾を得ていたはずでした。それなのに、そのようなことになりまして、入学された方々がこのままでは資格取得ができない、院生に約束したことが果たせない、とんでもなく大変なことだと。私は当時、関先生の後任として学部長兼研究科委員長に就任したばかりの、つまり責任者になっておりまして、非常に深刻な事態のなかで、とにかく打開策を模索しなければなりませんでした。

それで結局どうなったかという、当研究科の臨床心理学コースの院生を文学研究科心理学専攻に移籍をさせることになりました。大学総長を仲介役として当時の文学部長であった前田先生と私とで協議し、方針が固まったところで研究科委員会や部長会に議案を出し、院生への説明会を開き、院生から個別に承諾書をいただき、文学部長と私の2人で合意書にはんこを押してですね、向こうに移籍をしていただく。実際には、当学部の教員が教育をするんですけど、立場は文学研究科心理学専攻の兼任教員として位置づけるというようなことで、その年は乗り切りました。しかし、次の年から臨床心理学コースで入学者を取ることではできませんので、募集停止にいたしました。

大学院関係では引き続き、博士後期課程設置の業務を担いました。臨床心理士養成という当初の目的が消えて2専攻制にする必要性がなくなりましたので、この機会に、社会福祉学専攻と人間関係学専攻を合体してコミュニティ福祉学専攻1専攻のみの研究科として設置認可を申請し、2004年度にスタートしました。カリキュラムは、スポーツの先生にも語学の先生にも担当していただきました。フランス語といっても、フランスの美術とか歴史とか文化とかを専門にしておられたし、スポーツの先生もスポーツ社会学などそれぞれの専門があるわけですから、1科目くらいは担当していただいて、大学院は全員参加でやりましょうということで、作り替えました。その後、多くの修士学位、博士学位取得者が生まれ、その方々が研究者として、また実践家として活躍しておられ、本当によかったなと嬉しく思っています。

次に話題を変えたいと思います。「その後の大学の変化の中で」という小見出しがつくような、大学全体との関係の中で生じたコミ福の変化に関するお話してございます。大学院の開始直後に生じた暗転、残念無念な出来事は、大学院ばかりでなくその後のコミュニティ福祉学部の展開にも大きな影響を及ぼすことになりました。その変化は、当時の大学全体の発展計画が絡まって、加速されました。

大学では2002年5月に大橋総長から押見総長に交代し、新たな発展計画、特に新座キャンパスの再開発が実行段階に入ろうとしていました。私は2002年4月から2006年3月まで学部長、その後2010年3月まで副総長をやっていて、大学の発展計画の策定に巻き込まれ、コミ福の改革にも着手することになったのです。2006年4月に池袋に経営学部ができましたが、新座では同年、現代心理学部の新設、コミ福と観光学部の2学科体制化、6号館、7号館、ユリノキホールの新築という大きな変化がありました。また、現代心理学部の大学院には臨床心理学専攻が新設されました。その後も変化が続き、2008年度には新座にスポーツウエルネス学科、池袋に異文化コミュニケーション学部、2009年度には池袋にキリスト教学研究科が新設され、2010年3月には新座8号館が完成しました。この過程で、コミュニティ福祉学部の臨床心理学のお2人の先生はお隣の現代心理学部に、聖書学のお2人はキリスト教学科に、言語の先生は異文化コミュニケーション学部に移っていかれる。スポーツ健康科学の先生たちは社会学部におられたスポーツの先生と合流してこの学部の中にスポーツウエルネス学科を作られるというようなことで、創設時にこの学部が集まった人たちの半分くらいは、それぞれに新しい場所でご活躍されるようになりました。

その新しい場所の1つとして、最初はなかった分野として2006年4月に「コミュニティ政策学科」が生まれました。コミュニティ形成はコミュニティ福祉学部創設に当たって本来意図された課題ではありましたが、教員の陣容という点からは厚みの薄い分野で、強化の必要がありました。この学科ができた背景としては、心理学や宗教学の先生方が他学部、他学科に移籍されるというような変化、また定年退職を迎える先生が出はじめたというような教員組織の変化が大きいと思います。教員を純増することは非常に困難ですから、専任教員枠に空きが出たところで新しい分野の専門家と入れ替える、その余地がこの時期に生まれたことが最も大きな理由です。この際、この機会に、コミュニティ形成の学問を体系化した学科を構築してみようという計画が立案されたのです。

コミュニティ政策学科の教員組織は、定年退職者や移籍者が出るたびに、その後任人事として学科構想を実現するために必要な先生を採用することで整えられていきました。これには6、7年かかりました。2013年ぐらいに当初の人事構想が完成したと思います。そして、2014年3月に学科の教員が全員参加で執筆した『コミュニティ政策学入門』（誠信書房）という書物を上梓することができました。

私としては、自分の定年前にこの本を作ることができて、本当によかったと思います。その前の年、2013年3月にはコミ福15周年記念として学部の全教員が参加して『新・コミュニティ福祉学入門』（有斐閣）という本も作らせていただきました。私からのお話しは、以上でございます。

司会（鍛冶）では、福山先生、お願いします。

福山 では、引き続き、今の坂田先生の話聞きながら当時のことを思い出して、血がふつふつと煮えたぎっていました。当時の臨床心理学の生き残りが私です。2人の先生は現代心理学部ができる時にそちらに移籍されました。もう1人、先生がおられたのですが、6年目でお辞めになりました。1人だけ残された私はなぜここにいるのかと、だんだん分からなくなり、コミュニティ福祉学部が学部のアイデンティティーをもう1回再構築しなければならない状況に立ちいたりしました。

臨床心理士資格認定協会が主催する研修会が毎年あり、私は臨床心理士の資格持っていましたので、研修会に出掛けるたびに担当理事さんに確認していたのです。ぎりぎりの段階まで大丈夫だと信じていましたが、突然、梯子を外されたのです。かわいそうなのは臨床心理士を目指して大学院の第1期目に入学してきた学生たちです。コミュニティ福祉学研究科に入ったと思ったら、文学研究科心理学専攻に移籍させられ、しかし、教育はコミ福の教員が担当する、という複雑な対応でした。最初に入學してきた人たちは臨床心理士の資格を取る計画の人たちでしたが、彼らはコミ福の修了証書ももらってないのです。

怒りはちょっと納めまして、私は今のお2人の先生がたの話聞きながら、これはぜひお伝えしたいなと思うことが1つあります。それは、なぜ宗教やスポーツや言語の先生たちがコミ福の教員としていたのかということです。その当時、文部省がそれまでの大学設置基準を変更して一般教育部を廃止するという方針をだしました。立教大学はそのための措置として「全カリ運営センター」という組織をつくり、それまで「一般教育部」という組織で担当してきた科目を、全学部が共同で一般教養・リベラルアーツを担当するようになりました。それまでは、一般教育部に所属していた先生たちが大勢おられたのです。当時まで、体育は必修科目でしたから10余名いました。英語やフランス語といった語学の先生たちもおられました。それから、キリスト教倫理学や哲学、生物学、社会学の先生たちもおられた。その先生たちが各学部にも所属する形をとることになったのです。

そのときに、体育・スポーツの先生たちは、全員でコミュニティ福祉学部に行きたいと決めたのです。併せてキリスト教関係の先生方も5名ほどコミ福に来られました。反面、それでは学部としてどういうふうに学部教育をつくっていくか

と、とても混乱してしまいますので、坂田先生の先ほどの説明のように、少しずつ学部教育の方向性をはっきりとさせながら、大学の大きな方針と照らし合わせて教員構成を模索してきたという経過です。

考えてみれば、それは私にとって、大変ラッキーなことだったと思います。そうでもなければ、スポーツの先生たちと交流することはほとんどあり得ませんでしたし、キリスト教学の中でも佐藤研先生、月本昭男先生とか鈴木範久先生などの高名な先生たちと一緒に席を並べることはなかったと思います。

ところで、コミュニティ福祉学部は他の学部と違ったユニークなことが一つあります。それは『人間の尊厳のために』という学部の教育スローガンを掲げたことです。これは立教大学の中では最初の試みです。学部構想をつくる時に、『人間の尊厳のために』をめざして学部のアイデンティティをつくろうという話をしていました。その後、佐藤研先生が「これおかしいよ。人間のためじゃなくて、むしろいのちのためにとすべきだ。いのちの尊厳のためにとすべきだ」と提案して、今では『いのちの尊厳のために』というスローガンになっています。こういう話は、福祉や心理やスポーツの人たちだけが集まっても、出てこない発想だったと思います。とても素敵な思想的コンセプトを整えてもらったのです。とても幸せなことだった、と私は思います。

ここまでは大きな話をしたのですが、少々個人的な話をさせていただきます。私はコミ福時代で思い出すことがいくつもありますが、その1つは、沼澤先生が話してくれたのですが、1年生しかいない学部の中で、複数の担任で基礎演習を担当しました。その最初の基礎演習で担当した学生のことです。最初の年のIVY festaの実行委員の1人で、広報担当だった女子学生でした。その学生が開設した年（1998年）の夏休みに突然死したのです。朝起きたら亡くなっていたそうです。彼女のお宅までお葬式に出掛けました。入学して数か月という本当に短い大学生活で、あっという間に亡くなってしまったのです。いまでも心に残っています。もう1人思い起こします。その人は、私が担当した2005年の4年生の女子学生です。この人はもともと心臓が弱かったのですが、卒業直前の2001年10月に亡くなったのです。単位はすでに全部取得していましたので、お父様が教務課の窓口に来られて、「娘は全部単位取れているから卒業証書を出してほしい」とお願いしました。教務課は、亡くなった方に卒業証書は出せませんと返事をしました。その上で、教務課は先生のゼミ生ですと、私のところに話を持ってきたのです。それで、私はチャプレンの上田亜樹子先生を尋ねて、ゼミの卒業式をやりたいとお願いしました。校歌や祝辞のない式を工夫していただき、手製の卒業証書に追悼文を書きました。ゼミ生とご両親と上田先生とで、祈りのある小さなゼミの卒業式をやりました。亡くなった人のことを思い出すのは、こういう機会かなと思いますので、お話し申し上げています。

コミ福の時代の、私の一番の大きな経験、豊かな経験ですけど、学生と教員との距離感がとても近かったと感じるところです。もちろん、教員同士も当初、1学科時代は、合宿研修会をやったり、みんなで何とかしよう、話し合おう、決めよう、その当時すごく生き生きしていました。その頃のことを思い起こすと、学部がだんだん細分化されて専門として独立していくことが、はたしていいことなのかと私は思っています。

話が、ちょっとそれてしまいますけど。私が学部長だった時代に、このまなびあい学会が立ち上がり、そしてスポーツウエルネス学科が立ち上がっています。

私はスポーツのことは全く門外漢で、運動音痴で。かけっこをするといつも後ろから2番目ぐらいという、そういう子どもでしたから、ゼミで体育館を借りて時々運動する機会を作りました…。

福山 やりました。何とか吹き矢。

沼澤 スポーツ吹き矢ですか？

福山 スポーツ吹き矢。吹く吹き矢です。その時は、私は割とうまくできたのです。そういう機会をつくれたのも、スポーツの先生の助けがあったおかげだと、あらためてこの場を借りて感謝します。

ちょっと話があちこちしていますが。最初に関先生と2人で学部の構想を、カリキュラムをつくり、人事構成をつくってやってきて、さて、いよいよ、最初の学生たちを迎えるときのあのドキドキした気持ちは、多分一生に一度の経験ですね。何人合格者をだしたら、一体、何人が入学手続きしてくれるかが、まったく分からなくて悩んでいました。定員は190名でした。関先生がそのとき学部長ですごく苦勞されて、ふたを開けてみたら、なんと300人が手続したのですよ。もう、嬉しかったですね。こんなにたくさんの方がこの学部に期待して、来てくれたのだと。

私は本当に嬉しかったです。そして、その最初の1年生がIVY Festaをつくり、学部やキャンパスをつくることに大活躍してくれて、本当に心強かったです。取りあえず、ここまでにします。ありがとうございます。

関 もういいです。

司会（鍛治） いや。関先生の、ぜひお話を。

関 はい、どうも。先生がたのお話の中で十分尽くされてると思うんですけど。最初の、学部につくられた頃のことをっていう三本松先生の要請でしたから。私は考えたのは、ちょっとだけ申し上げますと、立教大学は『キリスト教に基づく人格の陶冶』っていうことがあって、130年という歴史を持っているわけなんですけれども。そこには社会学部に社会福祉コースというのがあったけれども、現役の庄司洋子先生や木下康仁先生がおられて、社会福祉研究所があって、社会福祉領域へのそれなりの取り組みが続けられてきていたわけなんですけれども、学部としての独立はなかった。そういう意味で、その中で、先ほど福山先生のお話の中にありましたように、一般教育部の解体、そして、それが一般教育部だけで教養教育を成り立たせるんじゃなくて、全学の教員がリベラルアーツを担うんだ、という展望の中で一般教育部の解体がおこなわれました。その結果、それぞれの一般教育学部にいらっしゃる先生方が学部に分散する、と。このことを、後で申し上げますけれども、ポジティブに受け止める方と、そうではなくてネガティブに、自分は左遷させられたといった、他律的な原理によって移籍したというふうに考える方もいらした。コミュニティ福祉学にその思いがなかったわけではなかった。そういう意味で、30数名で成り立った、1998年のコミュニティ福祉学部なんですけれども。いろんな不協和音がアンダーグラウンドっていうか、根底に流れていなかったとは言えない、と私は感じております。

カリキュラム編成、先ほど学部開設の話、準備室の話が出ておりましたけれども。福山先生が準備室長になってくださった。そして、そこに私が加わり、高橋紘士先生と三本松先生がアドバイザーとして加わってくださっていて。そこに毎日のような、人事の問題だとかカリキュラムの問題などで話し合いをしていたことが、すごく懐かしい思い出としてあります。福祉学について無知であった私自身は、大変苦勞しました。特に隣にいる福山先生には苦勞しました。先生に苦勞したというよりも、先生との周波っていうか、歩調っていうか、周波数を合わせることの難しさっていうか。僕の中にはカウンセラーに対する偏見っていうのがあって。操作されてるんじゃないかっていうふうな気持ちがあってもあって。彼の中にはすでに答えがあって、その逆のことを出してきて。そして、僕に問いかけているっていうような、その答えを待っているっていうような感じが、僕の中には偏見がすごくカウンセリングに対して、無知ゆえになさしめる偏見がありました。

その中のことを一つ言えば、私はやっぱり、分からないなって、こういう提案のなされるわけですね、福山先生から。そうすると僕は「分からないな、それはちょっと、その先生が適当であるか、そういう専門科目がコミュニティ福祉学部に必要なのか分からないな」って思わず言ってしまうんですよね。そうすると彼の言ったことは「関さん、分からないと言わないでくれる」って言うんですね。

分からないと言ってしまうことは責任的でない、ということを書いてたと思います。そしてその厳しい言葉の中で、私を叱咤激励してくださっていたと、今になっては受け取ることができる。そういうつらい、日々、思い出が、学部創設。だから、一つの学部が誕生するときにはいろんな問題が起こると。それまでの隠ぺいされていた、隠されていた問題がマグマのように噴出して来る、という状況があると。その事実として、私はその年、眼底出血をしました。だから、三本松先生が病気にならないように願っておりますけど。

そして、先ほどありましたように、学部名称を社会福祉学部とはしないで、コミュニティ福祉学部とすること。それから、学部のモットーとして『人間の尊厳のために』ということにしました。しかし、佐藤先生が、人間のっていうのは狭い、ということで、『いのちの尊厳のために』ということを主張してくださいました。そして、佐藤先生、月本先生のお名前を、福山先生からも出ましたけども、お二人は聖書学の先生でテキスト批評から、月本先生はヘブライ語、佐藤先生はギリシャ語、それをコミ福の授業でやったんですよね、そして、佐藤先生はさらに研究室の中で禅をやる、というようなことがありました。

佐藤先生はいろいろ批判を持ってらっしゃいましたけれども、10周年記念、2008年の文章の中で、こんなふうな、コミ福の幸福という一文を寄せられていました。それを僕、読みました。その中で、先ほど、いろんなネガティブ、ポジティブな理解があったっていう、移籍に関してですね、言いましたけれど、自分たち移籍組はっていうふうないうんですね。移籍組はこの学部にとって、つまりコミ福にとっては、流れ者集団であり、新座という地は池袋感覚からすればへき地ないしは左遷の地であった。そうであるから、ここから佐藤先生の本音が始まるんですけど、そうであればあるほどわれわれの新しい学部を共に築こうという屯田兵的意気込みが浸透することになった、と。これは非常に積極的な発言なんだと思うんですね。このことが幸いにして、この学部では誰かが偉がるという、ということが、ついぞ育たない学部に短期間のうちに成長していったのだ、と。このコミュニティ福祉学部の当時の独特な雰囲気表現してくださっていました。

コミュニティ福祉学部はこのようにして、当初から福祉学とはいえ、それぞれの多様な専門性を持った教員によって構成されることになりました。

そのことが実は、かえってこの学部を教員の一人一人がそれぞれの専門領域に閉じこもるのではなくて、異なる領域の教員同士が自分の専門領域を他専門によって相対化する。他専攻によって自分の専門を相対化される、そして、対話へと誘われる。それは誰のための学問また学問研究なのかっていうことを自らに問う自由と課題をもたらしたんだと私は思っております。すなわち、コミュニティという名前にふさわしく、いってみれば多様性の一致、その言葉の内容は、私流

に理解すれば、誰一人、不必要な存在はない、むしろコミュニティにとって一人一人が不可欠な存在。そうなるときに、そこにコミュニティが誕生すると、そういうふうに思います。こういうことをつくり上げる大事なスピリットがこの学部には当初から働いていたのではないかと、そういうふうに思います。

ですから、もし現在も、三つの専攻に分かれていることによって、それぞれがたこ壺化されることであるならば、コミュニティ福祉学部の名にふさわしくないと、そんなふうには私は失礼を顧みず、三本松先生のご苦勞を省みず、あえて申し上げれば、やっぱり何のための学問、誰のための学問をしてる、ニーズを持った人との関係の中で学問をしているはずだから、自分の専門領域をぜひ開いていかなくちゃいけない。相対化していかなきゃいけない。専門性っていうのは、自分のやってる専門性からどれだけ自由になれるかっていうことが専門性だと、そんなふうには思います。

それで、フィールドワークだとかコミュニティワークの話がずっと出てましたけれど、その頃私たちはヒューマン・ドキュメントインタビューっていうふうに入ったんですね。ヒューマン・ドキュメントインタビュー。でも、文科系だとかそれまでの大学の中で座学に集中していた先生方からすると、ドキュメントといえばprinted matterだと、印刷されたものなんだと。それが、生きられた現実がどうしてドキュメントになるんだというふうなことを言っていました。そのへんのやりとりっていうのは大変美しい話が出てましたけれども、ドキュメントの理解っていうものは非常に学部の中で苦勞したっていうふうに思います。

その中ですごく救われたのは、ある学生が現場に行き帰るときに、そのニーズを持った人が、ありがとう、と言ってその学生を教室に帰す。そのとき、その1人の女性が『ねえ、あなたたち、私があるがとうとしか言えない悲しみが分かる』って言われて。誰かがその教室に戻ってきて、それをどう反すうするかっていうことをすごく課題にして。そういうのが、ここの学部の研究であるんじゃないかっていうふうにも思いました。

そんなとこで、取りあえず私の話は、坂田先生が帰る時間を気にしてらっしゃいますから。

**三本松** 今、関先生がおっしゃったように、ちょっと時間を気にしなければならなくなって参りました。沼澤先生にコミ福の沿革を語っていただき、そして坂田先生にコミ福の枠組み、変化を語っていただき、福山先生にコミ福のアイデンティティについて語っていただき、関先生にスタート時のいろいろなお苦勞、そしてコミ福のたこ壺化への警鐘を鳴らしていただくことができました。コミ福をつくり上げてくるときに、われわれ教員だけではなくて職員の方にも非常にご尽

力をいただきました。今日、こちらに2人来ていただいていますので、まず三邨寛文さん、お願いいたします。

**三邨** 立教学院募金室で仕事をしております、三邨（みむら）と申します。

新座キャンパスとの関わりは、1988年に法学部国際比較法学科の新設から10年ぶりに、立教大学が新しい学部を新座に開設するということが、文部科学省の学部設置認可の申請に携わることになりました。そして、1998年に、新座キャンパスにコミュニティ福祉学部、観光学部の2つの学部を開設することができました。当時は、池袋に文学部、経済学部、理学部、社会学部、法学部の5つの学部しかありませんでした。この2つの学部の設置を引き金に、立教大学は、現在10学部を抱える大きな大学に拡大発展いたしました。

当時、私は大学のコンピュータ関係の事務局で仕事をしておりました、いきなり新学部開設という大学の一大事業に携わることになりました。末端で仕事していた人間が、いきなり火の見櫓に連れていかれた感じです。ご出席の関先生、福山先生と、申請の調整にあたり文部省にも足しげく通っておりました。当時の文部省は、認可行政ということで、若い職員が他の大学のかかなり年長である理事長とかを平気で叱りつけているシーンを何度も目撃しました（今、世間で話題となっている加計学園の獣医学部新設絡み仕事です）。非常に苦勞いたしました。誰もが経験できるものではなく、この事業に参加できたことを今も光栄に思っております。私の仕事人生の半部の15年近くを新座キャンパスの開発事業に携わって参りました。現代心理学部、スポーツウエルネス学科の開設、学部設置のみならず、新座の建物、スクールバス導入、コンビニ開設など様々なキャンパスメイキングの仕事もさせて頂きました。こういったことから、どの職員よりも、私はこのキャンパスに愛着を持っております。開設当時には、コミュニティ福祉学部の初代学部長である関正勝先生の名前を冠した野良猫を事務所で飼っていたこともありました。その猫は、私の家で老後を過ごしております。大学猫として本に紹介されたこともありました。

坂田先生（二代目の学部長）とは、新座キャンパスの独立論や、池袋追従は止めようなどと、熱く語るなど、そんな血気にはやった時代もありました。しかし、時が流れるのは速く、開設した当時の先生方の多くが大学を去りました。現在、私も池袋に戻り10年位経ちますが、変わらず新座キャンパスを応援しています。池袋キャンパスとは逃れようのない格差とか不便さ、情報が届きにくい（コミュニケーションがとりにくい）といったマイナスなことも沢山あります。池袋と同様である必要はないと思っています。新座らしい文化を作ってほしいと願っています。そのためには、様々な議論をして、新座から発信していくことが重要です。池袋の人たちもきっと受け止めてくれます。

コミュニティ福祉学部と観光学部は、日本で一番の学部になると信じて両学部の設置事業に関わりました。今も変わらず、そう思っています。教職員、校友のみなさん、そして現役の学生のみなさん、新座キャンパスの発展のために、これからも活躍頂きたいと思います。

**三本松** 三郎さん、ありがとうございました。今、お隣に佐藤百恵さんがいらっしゃいます。

**三郎** 本人がちょっと恥ずかしがっているので私が紹介します。当時、立教大学の文学部心理学科を卒業して、新座キャンパスに新人として勤務していた、佐藤さんです。

**佐藤** 現在は池袋キャンパスの大学教育開発・支援センターで勤務しております、職員の佐藤と申します。私は三郎さんのように学部開設の準備段階から関わったわけではないのですが、開設2年目の1999年に、新卒で新座キャンパスに配属されました。

三郎さんの他にもう1人森園晴美さんという先輩がいらして、3人で教務事務の業務を担当しておりました。コミュニティ福祉と観光の2学部を3人で担当していたのですが、勤務して2、3年目から、私はおもにコミュニティ福祉学部を担当することになりました。社会人経験が浅く、大学内のこともよくわからない新人が担当者となり、先生方にいろいろとご迷惑を掛けることが多かったのですが、とても優しく指導していただきました。

その頃は在学生数が今と比べると少なかったこともあり、窓口にいらした学生のみなさんのこともよく覚えています。今日受付で担当者の方にごあいさつした際に、「以前、事務室の窓口にいりましたよね？」と言われたのですが、卒業生のほうもよく覚えていてくれて、学生との距離が近かったのだなということであらためて感じました。

**三本松** ありがとうございます。慌てて申し訳ないんですが、坂田先生がもうそろそろ出なければいけないので、坂田先生、出る前に一言お願いいたします。

**坂田** はい。すいません。私、明日、今、働いている学校の推薦入試があって、今夜中に九州に戻らねばなりませんので、途中で退席させていただきます。

コミュニティ福祉学は多数の個別学問が集まった学際的学問ではありますが、人間社会の常として、うっかりすると個別学問ごとに内部で小さくまとまって利害主張をしがちになります。しかし、コミュニティ福祉学は全体として大きくまと

まるところに存在意義があると思います。そのまとめる論理をどこに求めるかは、この学部にとっての本来的課題といえます。私、昨年3月の定年退職に当たって、『まなびあい』第8号に、そのような観点からの1つの考え方として、「コミュニティ福祉とは何か」という文章を書きました。3つ学科があって、学生の中には、スポーツウエルネスの学生は特に、なんで自分たちは福祉なの、と思う人がいるのではないのでしょうか。そのこともあって共通概念を述べさせていただいたのがその文章です。お暇なときに見ていただければと思います。

その文章のなかで、コミュニティ福祉学にとって最も基礎的で、多くの学問による検討を必要とするいくつかの概念を提示しております。「ニード」も一つですが、読み返してみると一つ書き忘れたことがあることに気づきました。ニードは言葉それ自体としてはマーケティング領域でも用いられるなど、必ずしも福祉と必然的に結び付いた言葉ではありません。ニードはそれが生ずる原因やプロセスと関係づけて初めて、福祉的概念になるということを書き忘れていました。人間は強い人もいるし弱い人もいますが、弱い人の集団をカテゴリー的に固定的に捉えてしまうと、福祉概念が特定カテゴリーの弱者に限定された問題としてとらえられてしまいます。しかし、人間は変化する存在で、強い時ばかりでなく弱い時もある。例えば、『グレート・ギャツビー』っていう小説ありますよね、映画にもなりました。あの小説の書き出し、出だしは『In my younger and more vulnerable years my father gave me some advice…』で始まっています。「僕がまだ若く、もっと弱くて傷つきやすかった頃、父が助言をくれて、…」という書き出しで始まるわけですね。グレートなギャツビーでも弱い時があった。いつも強いばかり、弱いばかりじゃなくて、普段は自立して暮らせていても、危機に直面して人に助けを求めるときがある。普通に暮らせているときばかりでなく、苦難にまみえることもある。そうした変化する人間に生ずる「弱さ」、ヴァルネラビリティは普遍的であり、特定領域に福祉を閉じ込めてしまわない視点として、多くの学問からアプローチできるテーマであると思います。強いスポーツ選手でも落ち込むことがある。そのような「弱さ」の中に現れる「ニーズ」を見出し支援できるコミュニティを作る、これがわれわれの学部の最も基本的な課題であると考えております。現コミ福祉部長である三本松先生は「脆弱性」という概念を用いた研究をしておられますが、学部のみならず自分の専門でやっていることの意味をそういうところに引き寄せて考えてみると、この学部で勉強したり研究したりすることの意義が明らかにされていくのではないかと、そして、そうしたことを全学生に教える授業があればよいのだが、と思います。

さて、この話は尻切れトンボで申し訳ないのですが、志木駅に行く時間になってしまいましたので、これで失礼します。

**三本松** 限られた時間の中ありがとうございました。お帰りになりながら、坂田先生の映像を。

**坂田** おお。こういうこともありました。

(ナレーション) その大学のゼミは新しいコミュニケーションの場を探していました。その場を提供したのはMobile V-Campus。i-modeを使って学内の情報を入手したり、研究に関する意見をサイト上で公開したりできるのです。

(ナレーション) 大学の情報化も予想以上に進んでいるようです。そのビジネスの力にdocomoのi-mode。

**三本松** この映像はモバイルVキャンパスっていうものを立教がやり始めたときに坂田先生が貢献されて、自らTVCMに出ていた、というものです。

**司会 (鍛治)** では、すいません。ちょっと時間が押しておりますけれども、いったんここで10分ほど休憩を挟みたいと思います。その後、今までのシンポジストのお話をお聞きした中で、フロアの皆さまからのご意見をいただきまして、残り時間をフロアとシンポジストの方々とセッションとさせていただきます。では、皆さま、5時10分から再開させていただきますので、それまでにはお戻りいただくようお願いいたします。

**司会 (鍛治)** それでは皆さま、大変恐縮ですけれども時間となりましたので、シンポジウム、残り時間も少なくなりましたけれども後半のほうを始めさせていただきます。

4人のシンポジストの方々から、コミ福の過去から現在まで、ということでお話しいただきました。ここからフロアにご来場の皆さまから各シンポジストの方々に伺いたいこと等、何でも構いませんので何かございましたら、お手を上げていただいて。シンポジストの方たちからまたお答えいただく、ということにしたいと思います。

よろしいですかね。それでは早速ですけれども、各シンポジストの方々にもう少しこのあたりが伺いたい等ございましたら、お手を上げていただきまして。所属とお名前をおっしゃっていただいでご発言していただければと思いますけれども、いかがでしょうか。

**木下** コミュニティ政策学科教員の木下と申します。いろいろな過去の貴重なお

話を聞かせていただきましてありがとうございました。私は2016年4月に坂田周一先生の後任で来ましたので、まだしっかり分かってないことも大いにあります。その中で、ぜひ詳しくお話を伺いたいと思っていることは、先ほども出しましたが、「コミュニティ福祉学」という言葉の意味合いをもう少し詳しく教えていただけたらいいなと思いました。社会福祉学部ではなくてコミュニティ福祉学部にしたということの意味合いや思いをお話しいただけたらなと思います。よろしくお祈いします。

**関** 僕らが考えてるのは地域福祉だとか社会福祉だとかっていう言葉があると思いますが、何となくイメージとして地縁、血縁っていつも繰り返してることなんですけども、そういう縁によって結び付けられる関係っていうのは、既にできあがった、ある意味いわゆる閉鎖的な関係っていうようなものがあるんじゃないかっていうように、僕らは考えたんですね。そして、さきほどもちょっと申し上げたんですけども、一人一人の存在が社会を構成する上で、成り立たせる上で、不可欠な存在だ、ということ。

さっき、弱さっていう話が坂田先生から出たんですけど。聖書にも出てくると思うんですけど、弱いときに強いついていうか。強さっていうものは他者を排除して成り立つと思うんですね。隣にいる人が邪魔になる、自分一人で自立できるから、という強さがあると思うんです。しかし弱さっていうのは隣にいる人が自分にとって不可欠な存在だっていうふうに受け止めることもできる。そういう意味において、誰一人、不必要な存在はない、むしろその社会にとって不可欠な存在だっていうことをつくり上げていくのが福祉だろう、と。そんなふうに思いました。

そのときできあがるのがコミュニティではないか。だから、コミュニティは既にあるのではなくて、やっぱり私たちの営みの中でできあがっていく、そんなダイナミックなものではないか、と。必然的にコミュニティは、人間の関係の中でダイナミックな形で創出していく、常に新しく誕生していくものであって、地縁、血縁とは異なるだろう、と。そんなふうには思っていた、と。そういうことで、あえてコミュニティ福祉っていうふうにやっただと思いますけど。

福山さん、どうですか。僕、また、関さん、そう言わないでって言われそうですけど。

**福山** 私はこの学部の名前は、最初は反対だったのです。高校生の目線で「コミュニティ福祉」がイメージできるだろうかというのが、私の根本にありました。コミュニティと言葉を付けることによって、高校生が分からなくなるのではないかと心配したのです。だから、「人間福祉」くらいにしましょう、と、ずっと主張

していました。いろいろ議論した上で、譲歩しました。今、関先生が話してくださいました。ほぼ尽きます。地域福祉という言葉や概念は福祉の世界にありました。その地域は行政エリアですよ。そうすると、結び付きとか連帯とか運動みたいなものをうまく表現できないと思いました。コミュニティという言葉がそれを表現できているかどうか、自信がないですけど。それに近づけようという志しをその当時、感じました。今では、結構、気にしています。(笑)

そもそも最初、新学部をつくるときの当局の提案では、「コミュニティ政策学部」と「観光学部」の、2つをつくりたいというものでした。私は「コミュニティ政策学部」構想のために新学部設置準備室に呼ばれました。しかし、途中で「政策学部」では認可されないということが判明しました。当時、3つの領域だけが許可されていました。それは、「福祉」と「看護」と「情報」でした。その3つの領域は将来人手が不足する、と予見していたようです。そういう意味では、介護の人手を必要とするという発想で文部省が福祉を捉えているのは明らかでした。でも、それだけでは不十分だと思いました。そういう意味ではコミュニティ福祉学部という、思想性を私はとても気に入っています。

いま思い出したのですが、当時、コミ福でのスポーツの教授で藤井陽江先生が、学部開設の4月に1年生が集まる場で、「皆さんコミュニティ福祉学部に入學おめでとう。でも、今日からはコミュニティ福祉学部と呼ばないで、コミ福と呼びましょう」と提唱して、それ以来「コミ福」に定着しています。そのコミ福という言葉は、とても気に入った言葉になっています。

**木下** ありがとうございます。

**司会（鍛治）** ありがとうございます。他にいかがでしょうか。フロアの方からいくつかいただいてからシンポジストの方にいただきたいと思います。

**在学生A氏** 福祉学科3年生です。本日は貴重なお話をありがとうございました。こういう場で質問するのに慣れてなくて、もしかしたら場違いな質問かもしれないですけどご了承ください。

最初に、沼澤先生が、年々実習に行く学生が減っている、とおっしゃっていたと思うのですが。私も今年度、実習に行かせていただいて、私の仲間も結構実習に行った子が多いんですけども。実習に行った子が現場に行くっていう話をあまり聞きません。私の友達も一般企業に行くっていう子が非常に多いです。先ほど、誰一人、不必要な存在はないという理念のもとにつくられたとおっしゃっていたんですが、やはり誰も排除しないっていう社会をつくるっていう中では、専門家がどんどん社会に出ていって支援していくっていうのが不可欠なのではな

いか、と思いましたので。昔の実習生って、私は3年なので3年前からのことしか分からないんですが、昔からいる実習生の方が現場に出ていくって多かったのかなっていう、疑問に思ったのが一つと。あと、今、現場に出ていくっていう人が少なくなっている現状についてどのようにお考えなのかなっていうことを思ったので、質問させていただきました。

**福山** どなたに質問。3人に。

**在学生A氏** 皆さんに聞ければな、と。思っ

**司会（鍛治）** あと、他にいくつかいただいてからまとめてお願いします。

**卒業生B氏** 福山先生にお伺いしたいんですけども。私は病院に勤務しております。本学の法学部と教育学科の卒業生で、教育学科のときには福山先生にお世話になりました。関先生にもお世話になりました。

私の知る限りで間違ってるのかもしれないんですけども、このコミ福が立ち上がるときに福山先生が、コミュニティ政策、政策にこだわられたっていうような一文を読んだ覚えがあるのですが。間違ったら申し訳ないんですけども。法学部があるのに、どうしてコミュニティ政策のところ、もしそれがそうだとしたらですよ、こだわられたのかなっていうのは一度お伺いしてみたいことだったのですが。

**司会（鍛治）** あとおひとかたくらいいかがでしょう。順番に。

**在学生C氏** コミュニティ政策学科4年生です。本日は貴重なお話をありがとうございました。

私が聞きたいのは、今回のテーマにも、サブタイトルにもあります、『過去を知り、未来を拓く』ということで、『未来を拓く』に絡めてお聞きしたいのですが。私のような、今、現在コミュニティ福祉学部在籍している学生や過去に在籍していた卒業生に対して、コミ福での学びを通してどのように未来を拓いていってほしいのかっていうことを、ご自身の考えをそれぞれお聞きできれば、と思います。

**卒業生D氏** コミュニティ福祉学部、政策学科のほうを先日、卒業させていただきました。

関先生や福山先生に、特に創設時の話としてお伺いしたいんですけども。

教学校で特に歴史も長い立教大学という中で、このコミュニティ福祉学部という学部を立ち上げられるにあたって、学部以前に大学そのものにキリスト教に基づいた教育だったりとかそういった理念、強い考えがある中で、それらに少し関連付けて、例えば、スローガンだったりとか教える内容の方針だったり、少しでも反映させられた部分でしたりとか考えられた部分があったら、少しお話しいただきたいな、と思って、今回質問させていただきました。よろしければどうか、お願いしたいと思います。

**司会（鍛治）** 皆さん、ありがとうございます。それではシンポジストのかたがたから一つずつお答えいただきたいと思いますけれども。

**沼澤** 僕が答えられることは少ないかもしれませんが。福祉実習に行ってなぜ現場に行かないのかっていうことについては、僕より福祉学科の先生に聞いていただくのがいいかと思うんですけども。スポーツの分野で例えばスポーツクラブのトレーナーになるといった現場を考えると、お給料も良くないし労働条件も良くないという結構厳しい現状にあります。でもやはり専門性を持ってそこを目指す学生はいるんですね。これからの時代はプロスポーツでも高齢者でもパーソナルトレーナーが身体能力を維持向上させる非常に重要なポジションを担っていきます。優秀な人は稼げるようになると思います。ですので福祉分野も本当にやりたいと思ったら、その現場に行ってやってほしいと思います。これは駄目だなと打ちのめされることもあるかもしれませんが、それを打開して切り拓いてほしいと個人的には思っております。

どのように未来を拓いていくかっていうことのご質問についてですが本を紹介したいと思います。ちょっと受け売りになってしまうかもしれませんが今話題になっている『Life Shift』という本があります。リンダ・グラットンという人が書いたものですが、「100年時代の人生戦略」という副題がついています。日本人の健康寿命がどんどん上がってきて平均寿命でいうと男子83歳、女子86歳ぐらいですけど、健康寿命がその5年前だとすると、約80年、思うようになる人生があるということになります。60歳で定年した後、20年どうするかって問題は、非常に大きいと思います。自己実現のためには今までの教育、仕事、引退っていう3つのパターンじゃなくて、いろんなステージで後戻りして自分探しをしたり、仕事をしながら別のことをボランティアとしてやったり、引退してからもう1回大学に行ったり、そういった双方向で自分の自己実現に向かってくんだってというような考えを説いているんですけど、そういう考えを実現するためには、自分はどういう人間かって知らなきゃいけないし、それから、自分が受け身ではなく能動的に動かないといけないっていうことをその本では指摘しています。そう考え

ると、コミュニティの中で自分がどういう存在で、いろんな人たちからいろんな意見をもらって生きていくっていうところで、コミュニティ福祉学部の考え方と共通していると思います。そのような学生が育っていけば、未来を拓いて行けるのではないかと思います。

**福山** 私個人に質問がありましたので、先にそのことを応えさせていただきます。私が政策学部にかかわったわけではなくて、当時、大学当局がそういう構想をお持ちでした。最初に私が設置準備室に入ったときは、法学部の先生と一緒に学部構想をつくるという話でした。ところが文部省から、3つの領域以外は認めませんよ、ということになったので、当局は、それでは福祉でいこうと決めました。それで、コミュニティ福祉学部構想になりました。

実習へ行く学生、卒業生が減っていることについては、私は今では外の人間ですから、特に申し上げることはないのです。コミュニティ福祉学部という学部に入ってきた学生たちの実態を、私が学部長時代に調べたことがありました。すると、他の大学や池袋の学部比べて2倍ぐらい、コミュニティ福祉学部の学生のほうが、ボランティア活動に参加していたのです。私はそのことをとても誇りに思い、学部長として新学期のガイダンスでお話した記憶があります。私は、何も正課としての福祉実習に行かなくても、ボランティアとして、社会全体がそういう活動に取り組んでいくことは、とても大切だと思っています。

学部ができたのは1998年ですが、その少し前の1995年に阪神淡路大震災がありました。あの年はボランティア元年という言葉が使われました。阪神淡路大震災のときは、本当に大勢の市民が、苦しんでいる人たち、困っている人たちに、何とかしよう、何かできることはないかと考えて、心を動かされたのです。そして、支援活動に取り組んでいた方たちをたくさん知っています。私は、日本も捨てたものでもないと思いました。

私は先ほど言いましたが、「いのちの電話」に45年ほど関わっています。あそこは、全員ボランティアです。交通費も研修費も自分で出して、孤独に悩んでいる、苦しんでいる人々と電話で対話しています。そういう人々が全国におられることを私はよく知っています。そういう意味で、ボランティアという形であっても何か現場に、人に関わっていくことができたなら、私はそれはそれで、すてきなことだと思っています。

正課としての実習では、施設や色々な場所で、単に道具の一部のように扱われると感じてしまう人がいるかもしれない。そのように受け身になってしまうと、とても福祉の世界ってのは悲しく、辛いものになっていくと思うのです。それよりも、自分が少しでも関わりたい、近づきたいところに取り組んでいけたらと思います。



**福山** 別に批判をしてはいないのですが。私がコミュニティ福祉学部を定年退職したときに、学部の先生たちが退職送別会を開いてくれました。そのときに私はこういう話をしたのを今、思い出したので、それをお伝えしたいと思います。

私は心理学を学んできて、不遜にも福祉学には理念はあるけれど独特の方法がない。福祉は場をつくる仕事をしてきました。しかし、人を助ける、人を支える、人を癒す方法については弱いと思っていました。そこに心理学が貢献する道はきっとあるはずだ、というのが私の設立当初の強い思いでした。福祉の先生たちとだけではなくて、いろんな先生たちといろいろな話をする中で、私は学びました。

何を学んだかというところ、福祉という学問は、あらゆる生活の悲惨さや困難さに決して目を背けない。目を背けないどころか、そこに価値とか輝きとか尊厳とかを見いだそうとする学問なのだ。私は、学部時代は教育学の専攻でした。その後大学院で臨床心理学を学び、最終的に、福祉学部へ来ました。今では、キリスト教の牧師養成の学校にも行っています。どこまで行くのか分かりませんが、教育学をやって、臨床心理学をやった上で、福祉学に来たっていうのは、私にとってとてもありがたかったと思います。福祉が目指すものは、決して目を背けない。そこに尊厳とか輝きとか価値を発見し、いのちを慈しもうとする姿勢を福祉やキリスト教の先生から学びました。そして、私はその思想を、支えてくれるのがキリスト教であってほしいと思っています。

そういう意味では、私の福祉学のある種の理想モデルに近いところでは、同志社大学や関西学院大学はいいなと思います。2つの大学には神学部があり、福祉学部があり、学部間での共同セミナーがあります。そして福祉学の先生たちが、神学の先生たちと一緒にシンポジウムを創ったり、ディスカッションしたりしています。その姿を見ると、なんて美しいなと思います。コミ福がそこへいくかどうか分かりませんが、だんだん価値とか意味とか思想が語られなくなっていくのは寂しいと思います。そこにキリスト教を付け加えるかどうか分かりませんが、宗教は根源的な価値を代表するものですから。そこから照らし出すものをキャッチしてほしいと思います。

**三本松** 時間を超過しておりますけれどもまとめたいと思います。関先生、福山先生、坂田先生のお話を聞くことができ、一緒に働いてきたことを思い出して、本当に幸せな時代を過ごせたんだなというふうに思っています。コミ福の20年を迎え、そのルーツをたどる、ということができたのではないかと、というふうに思います。要約はできませんけれども、コミ福らしさというものについて皆さまと共有することができたのではないかと、というふうに思っています。

20周年という言い方をしますと、今年が20年目で、20周年は来年度になります。

今日、未来を拓く、ということをどこまで議論できたか分かりませんが、できなかったところは宿題にさせていただきたい、というふうに思います。

(了)